

ちよいワルオヤジの諸国漫遊記
第五回 2025 年春 あの素晴らしい時をもう一度

大和川 一路

田主丸の先輩は今年 80 歳になる。私の知らない戦後 10 余年の世情を聞かせてくれる。半藤一利さんの『昭和史戦後篇』に似た語り口で、おもしろおかしく話してくれる。むかし姉様や村の女人たちが耳納から筑後川を越えて田植えの手伝いに行っていたそう。腰巻上げて横一列で田植えして、昭和の風景が浮かんでくる。「先輩、それって GHQ の農地解放で小作人がいなくなったということですか？」

九州を漫遊できるのも田主丸の先輩との出会いがあったから。先輩の趣味と興味に乗っかって東へ西へ、よくぞこんなに二人で遊び倒すことができたものだ。誘われたら断らない。

今度のお誘いは『あの素晴らしい歌をもう一度』、『別府ヒットバレードクラブ』。天神でのコンサートと別府のクラブ、音楽二連荘の約束をした。

まず、きたやまおさむさんのコンサート。『花嫁』と『風』の合唱から始まって、「人生のための歌を心がけてきました」と北山修さんは挨拶された。

三曲目はトワエモアが登場し、『ある日突然』や『初恋の人に似ている』。久美子さんの『イムジン川』や『愛の賛歌』。タブレット純さんの『青年は荒野をめざす』と進んで行った。

旅の歌が続き、「日本人の旅の歌はどこにも着かない」と分析されていた。「確かに、なるほど。さすが精神分析医はいいことゆうわい」と、二人とも上から目線で。幕間でパワーポイントを使って人生の生き方のレクチャーもあり、『あの素晴らしい愛をもう一度』までなだれ込んでゆくのだが、もうお一方小椋佳さんまで登場した。『さらば青春』から始まるのは、この曲は雰囲気を一変させる力があるからで、小椋ワールドが現出する。

かつてカラオケが流行り出した頃、私は上司の命令でいつも一番バッター、この曲で 10 年飯を食ったからそらで歌える。

先輩も私も心がチリチリして、あの日に帰っていった。

布施明さんに提供した『シクラメンのかほり』は B 面だったが大ヒットして、「お礼をしたい」と云われたが音沙汰なし。忘れていた頃、アメリカの出張先に「第一勧銀に預金しました」と連絡があったそう。

多分そんなオチかなとは思ったが、そうだった。

「歌い方を直してほしい」と意を決して意見して、「彼女は身の内に入れてくれた」そうで、

それが美空ひばりさんの『愛燦燦』。

これで終わりでも構わないのに、80 歳前後のこの方々が偉いのは、次世代の林部智史さんにトリを務めさせたこと。

二時間を超えてくると、じいちゃん、ばあちゃんが盛んにトイレに行き始める。この方、爆発するかもしれないから我慢して聞かなくちゃ。

「先輩、人生で一番のコンサートでした」

「そうじゃろ〜、ゴマサバ食べに行こか。俺、別府でサンディちゃん見たい。中洲のオールディーズで歌ってる娘たち、みんな彼女が育てたんだよ」

一週間も経たずして田主丸の先輩をピックアップして別府に向かった。

「右の背中と腹がチクチクするんですよ」と言いながら、「アニサキスが食いついているんだよ」と云われると、「チクチクが肝臓とか大腸に移動していくんですよ」と冗談交じりで痛みを和らげてみる。

「福岡の胡麻鯖はマサバでゴマサバじゃないんですよ。知ってましたか」

「他所から来ると、そおゆう事覚えるんじゃないあ」

「ところで、ドイツ語で歌えるようになりましたか？」

先輩はザルツブルグに行くことが夢、私はリバプールに行くことが夢。

二人とも歳を重ねて、コロナの三年の誤算はあったが、ヨーロッパへは昔の倍かかる。

25 万円でビジネスに切り替えると 50 万円が相場だったのに、今はもう 100 万円もして高くて行けない。

だから『サウンド・オブ・ミュージック』を何回も家で見ても、思いが募るのだ。

先輩はギックリ腰で頻尿だ。軽く考えていたが、いざ自分にもその気配が迫って来て、いつか所かまわず漏らす日がきつとくる。

むかし境川の土手で立ちションするおばあちゃんを見たことがあるが、もう他人事ではない。

腰痛と頻尿と割高の三重苦でヨーロッパは無理。



「別府の地獄めぐりは城崎の温泉巡りとは違うんですね。ブクブクを見るだけなんですね」

「そうじゃよ。ワニが一杯おるなあ。中国や韓国の人が楽しそうにしていると、食べたら片付けにゃ」

「別府って天神より面白そう。温泉があるのは強い。杉乃井への坂道はサンフランシスコみたいです」

「サルも湯につかって笑顔だし、お猪口で一杯あげたいよ」

「高崎山のサルは群馬の高崎と思っていましたよ」

先輩はベンチャーズ、私はビートルズ。音楽の定番会話にも花が咲き、60年代から70年代の時代がかぶさって、車の中でも飲み屋さんでもあらぬ方向に話が拡がる。

「ジャンケンで勝って、エレベーターガールに声を掛ける榮譽を得てね」

「緊張したでしょう。それでなんと」

「また、お会いしましょう」

「それだけ。60年も前のことをよう覚えてますね」

「そうじゃ、まだ三人記憶に残る娘がいるから教えちゃろか」

きっと、『初恋の人に似ている』の余韻が残っているのだろう。

自宅にアンプを揃えてスマホから曲を引っぱって、音楽が流れ込んでいる人生にネガティブなことは起こらない。



別府のヒットパレードクラブのステージは『悲しき雨音』から始まった。

当時18歳の先輩には涙するような曲なんですね。

『キスは目にして』も知っている。

「ピーナッツと違うよ。ヴィーナスのコニーちゃん。俺、踊ってくるわ」いつもすぐに踊りに行ってしまう。

『カラーに口紅』『すてきな16才』コニー・フランシスもニール・セダカもアメリカンポップスは聴いてはいるが知らないのだ。

ジルバやツイストか流行ったんだろう。

5, 6年のズレで音楽シーンが違うように、先輩と昭和の風景が違っていて、ちょっとした一言で「あっ、そうだったのか」と思い当たることがあるあるなのです。

むかし名古屋の栄のど真ん中に、「美人座」と「太平洋」というキャバレーがあって、社会人になってすぐに上司に連れていかれたが、硬直しておしろいの匂いだけを思い出す。

なんせこちらは踊りといえば、『オクラホマミキサー』しかやったことがないのだから。

上司は慣れたもので照れもせず踊るし、部下には奢ってくれるし、先輩と同じ世代の遊び人だったのだろう。

ずいぶん後に破産したと聞いたが、無頼漢みたいな人がまだ結構いた。

「俺、この前、卓上エレクトーン買ったよ」

「私もピアノ習いに行ったんですよ。クラブで『オー・ダーリン』を弾き語りしたかった」

団塊の世代の友人がハーモニカやウクレレを習っていると聞いて、一瞬なまぬるいと思ったが、いや違う。

ハギさんはブルースやジャズに入れ込んだ時があったのかもしれないし、サトさんはすてきな77才になりたいのかも、そう想像した。



これ世紀の一枚、歌は『スタンド・バイ・ミー』。スティーヴィー・ワンダーのピアノと一緒に唄う。ロンドンのスコッチレストランでの一枚で、マダム・タッソー蠟人形館ではありません。子供のようないいですが、別府温泉でも父親と息子が鬼の顔出しパネルに顔を入れている。両親と阿蘇の旅行で、父親が「くまモンと撮ってくれ」とやはり顔を入れていた。男子の習性と云えなくもない。

別府の漫遊もそろそろ終わり。

「先輩、富貴寺と鯉のぼり見て帰りましょうか。日本三大阿弥陀堂なんですよ」

「富貴寺なんて知らないよ」

中尊寺金色堂と平等院鳳凰堂は有名なのに、九州のものはイマイチ有名にならない。

「日本三大がっかりを知ってますか。名古屋のテレビ塔ってふざけたことを云う人もいますよ。はりまや橋と時計台。あと一つは忘れました。じゃあ世界三大がっかりは？」

「それより、腹のチクチク痛そうだな。じゃあ、聞かせてやるか」

『エーデルワイス』と思いきや、二人目の娘と文通した、三人目の娘と阿蘇の草原に絵を描きに來た、もう全部フルネームで覚えているし、キャーもうとろけてしまいそう。

あの素晴らしい純愛をもう一度でした。



「吾亦紅（われもこう）で腹ごしらえして帰ろう」

「ところであの看板、“春夏冬二升五合”って何？」

「エエッ!? “商い益々繁盛”。変換ですよ」

杖立温泉には鯉のぼりが空に向かって 3,000 匹も泳いでいた。

「先輩、岐阜県に行くときたようなところがあって、郡上八幡では吉田川に子供たちが橋の上から飛び込むんですよ。」

飛騨川には下呂や上呂って所もあって、鮎釣りや、やなで塩焼きフルコースもいいですよ。長良川の桜鱒の刺身を食べさせてあげたいですよ。九州の人は岐阜に行かないですねえ」

「ジャガイモは植えた。あれから前立腺や濁き目や病院ばかりだよ。チクチクはどう？」

「念で治しますよ。あとは時間薬です」

「この前、小作人がいなくなったとか云ってたでしょう。俺、耳納連山の山辺の方に住んでいて、姉さんたちは里方に田植えに行っていた。「やまべ、さとがた」とここでは云うんだよ。雨が水の縄のように降ってきて麓の方に流れてゆくから、山辺の田植えが先に終わ

って、だから里方に手伝いに行ける。GHQの指令で自作地が増えて、自作人が増えたんだよ。俺たち、「五反百姓」って云ってたけど、一反八俵として 60 kgで掛算してごらんよ。生活できるわけがない。あなたは工業の町だから計算出来んか」

半藤一利さんの「昭和史戦後篇」はあと少し。

先輩も連れ買いして 600 ページを虫眼鏡で読みだした。

1945 年から始まる 80 年の人生を重ねて、どんな読み方をするのだろう。

「5 月に博多どんたく見に行くから、中洲のライブ行こう。ベティちゃんが出る」

「行きますよ。ベティが好きですね。ストレス発散かフェロモン吸引かどっちでしょう」

音楽と昭和は私たちの時間旅行です。